東洋學報　第參拾貳卷　第二號　昭和廿三年十二月

論說

シナの民間信仰における竈神

つだ　さうきち

どの民族についてでも、その民族の習俗を知り、その習俗にあらはれてゐる民族の生活感情生活意欲を知るのは、かなりにむづかしいことである。その民族に屬しその習俗のうちに生活してゐるものは、それになれ、それをあたりまへのこととし、人が空氣を呼吸してゐることを意識しないように、その習俗が特殊の民族の習俗であることにきがつかない。從つて、きをつけてそれを觀察し、それについて考へ、それを一つの知識としてもつことを、しないのが常である。却つてよその民族に屬するもののほうがそれにきをつける。しかし、かういふ外からの觀察は、その民族みづからとしての生活の體驗をもたないために、やゝもすれば、かれらみづからの生活きぶんや知識やによつて、それを理解しようとする傾きがあり、習俗の眞のすがた

と精神とを見あやまるおそれが無いでもない。けれども、觀察の方法と理解のしかたとが正しければ、そのようなまちがひをすることなくして、よその民族の習俗を考へることはできるはずであるから、われ〳〵がシナの民族の習俗についての知識も、そのようにして得られるであらう。たゞそれを考へるための資料の一つとして、無くてはならぬ文獻の上の記述が、シナには乏しいので、それは、どの民族にもありがちな、上にいつたような事情から來てゐることでもあるが、そのうへに、むかしからのシナの知識人は、古典の上の知識を重んじて現實の生活のすがたを輕んずるくせがあるので、そこからもまた、かういふことが生じて來る。しかし文獻上の資料が全く無いではなく、いろ〳〵の形でそれが書もつの上にもあらはれてゐるし、また民國になつてからは、新しい學問の影響をうけて、知識人の間にも、民俗に關する資料を集めることが行はれて來たようであり、またそのようにして集められたものが、いくらかは世に公にせられてもゐる。さうしてそれらはみな、われ〳〵の研究のやくにたつものである。われ〳〵はさういふものと實地の觀察によつて得たところとを資料として、民俗のうちの一つのことがらを考へるにも、地方的にいくらかづつのちがひのある點を互にくらべあはせ、そのことがらの歷史的の由來と變化とを見、またそれをそのほかのさま〳〵のことがらとてらしあはせ、一くちにいふとシナの民族生活の全體をその背景として、そのことがらとそれに含まれてゐるシナ民族の生活意欲生活感情とを、明らめるようにすべきである。さて、次に考へようとすることがらは、かういふシナの民俗の一つとしての竈神の信仰についてである。こゝに述べたようなこゝろ用ゐの下に考へるのではあるが、現在のならはしについては、ひろく各地方にわたつて一々それを知ることができず、歷史的の由來を考へるばあひには、文獻の上の資料が乏しいので、ゆきとゞかぬふし〳〵が多いが、おほよそのけんとうはほゞつけられることと思ふ。

シナの民間信仰において、一種の道德的意義をもつたはたらきをするものとして考へられてゐる神に、竈神があることは、

だれでも知つてゐる。この神のことを說いた通俗的の經文に、竈君經とか竈王眞經とかいはれてゐるものがあり、また竈君福壽經といふようなものもあつて、民間に行はれてゐるし、竈神の像をそまつなすりゑにしたものが家々に祭られてもゐる。竈神は、文字の示すとほり、竈の神であるから、もと〳〵家々の竈にゐるものであるが、それが特に重んぜられるのは、竈の神であることよりも、この神がその家の人々の行ひのよしあしをよく見てゐて、月々のみそかに天に上つて、それを天帝にしらせるので、天帝はそのしらせにもとづいて、人々の行ひの「むくい」としての福と禍とをその家に下す、といふことから來てゐる。一種の道德的意義をもつたはたらきをするといふのは、このことである。（今、北平では、竈の神の天に上るのは一年に一度であつて、十二月の二十三日の夜がそれだとせられてゐる。ところによつては二十四日ともせられてゐるらしい。從つて、竈神の天帝にしらせるのも、一年ぢゆうの人の行ひのよしあしであることになる。こゝに月々のみそかといつたのは竈君經などの說をそのまゝ記したのである。）ところで、竈神のはたらきにある道德的意義といふのは、どういふものであるのか。それを知ることによつて、シナの民衆の道德觀念のどういふものであるかをうかゞふことができる。

竈神の道德的のはたらきは、よいことをすればその「むくい」として天帝から福をうけ、わるいことをすれば禍をうけるから、禍をさけ福を求めるには、わるいことをしないでよいことをしなければならぬ、といふことを人々にさとらせるところにある。このような「むくい」の考の上になりたつてゐる道德觀念が、道德觀念として低級のものであることは、いふまでもないが、しかし一方からいふと、「むくい」は、常識的な、または通俗的な、意味においての道德的秩序を世界になりたゝせるものとしての、普遍的な要請でもあるので、どの民族においても、一般的な道德的訓誡の根本には、いろ〳〵の違つた形をとりながら、みなその考がある。シナでは、いはゆる士大夫に對し知識あるものに對して道德を說いた儒敎ですら、この考がその思想にとり入れられ、積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり、といふことの說いてある易の文言傳が重んぜられてゐ

るし、左傳に數おほく記されてゐるいろ〳〵の說話は、どれもみな、といつてよいほどに、この思想を本として作られてゐる。だから、シナの民衆の道德觀念がこの考の上になりたつてゐるとしても、それはかならずしもふしぎではない。たゞ一般的な道德的訓誡としてではなくして、或る個人がおのれみづからの行ひの目あてを一々その「むくい」に置くことになると、それは道德的秩序のための要請から出たのではなくして、おのれひとりの利益を求めるところから來た考へかたになるので、その行ひの道德的價値は極めて低い。ところが、竈神の道德的のはたらきは、人々にかういふ考へかたをさせるところにある。さうしてこのことは、その行ひの「むくい」としての福と禍とが何であるかを見ることによつて、明かに知られる。福のおもなものは富貴と長壽とであり、禍のおもなものは貧窮と短命とである、とせられてゐるが、これは、つまるところ、おのれひとりの利と害とに外ならぬのである。自己の生活、現實の生活、が人の生活のすべてであるようにむかしから考へられてゐた民族においては、これもまた自然のことであらう。

なほ竈神の宗教的側面から見ても、同じことが知られるので、竈君經などによると、竈神の生れた日であるといふ八月三日にこの神を祭れば、福壽が得られることになつてゐるが、それを上に述べたこの神のはたらきにてらしあはせて考へると、竈神を祭るのは、天帝に對して、福壽がわが身に與へられるようなしらせをすることを、この神に祈る意味のことと、解せられる。（このことについてはなほ後にいはう）。だからそれは、竈神が天に上るばあひに、よい行ひをしたものとして天帝にしらせることのできるように、實際よいことをしようと心がけるのではなくして、わが行ひのよしあしは問はず、竈神を祭ることによつて、利益になるしらせをしてもらはうとするのであり、祭ることは一種の賄賂を提供することなのである。神にそなへものをし神をよろこばせて、それによつて福を得ようとするのも、また通俗的な意味においての神の信仰には概ね伴つてゐることであつて、どの民族の民間信仰にでもそれが見られるといつてもよいほどのことであるが、シナ民族においては、ほかの

民族よりも、もつと現實的な意義でかういふ祭が行はれてゐるらしい。人に對する行ひにいつでも報酬の觀念がからまつてゐること、特に權力をもつてゐるものに對しては賄賂を提供することが一般のならはしであること、を思へば、同じ態度をもつて神に對することは自然だからである。しかし、ほかの神に對してはともかくも、竈神のばあひには、それがこの神の道德的なはたらきにかゝはるものであるために、それによつて、祭られる竈神のこのはたらきがゆがめられることになり、祭るものにおいては道德觀念そのものをなりたゝせないことにさへなるのである。これは、「むくい」を目あてによいことをするのではなく、實際しなかつたよいことをしたように見せかけることによつて、それに對する「むくい」だけを得ようとするものだからである。近代の北平などの風俗では、竈神を祭る時、卽ちこの神が天に上らうとする時、のとなへごとに「好多說、不好少說、」または「辛甘臭竦、竈君莫言、」といふことばがある（帝京景物略・日下舊聞考）。天に上つたら天帝に、よいことはできるだけ多くいつて、わるいことはなるべくいはないようにしてもらひたい、または（どうせわるいことばかりだから）何もいはないでもらいたい、といふのである。また糖餅（ニホン語でのアメ）を火のもえさかつてゐる竈の口に置きまたは塗るならはしがあり（永平府志・北京指南）、かのすりゑにしたこの神の像の口のあたりに糖餅をぬりつけることも、また行はれてゐるさうである。これは、日ごろの行ひのよくないことを竈神が天に上つていはうとしても、口をあけて語ることのできないようにするためだ、といはれてゐる。竈神を祭るのが上に述べたような意味であることは、このことからも知られよう。かういふことをするのも、祭をするのも、つまるところ、同じ考へかたから出たことである。近ごろのシナの知識人がかういふ風習を非難してゐるのは、さもあるべきことである。

竈神が天に上つて人の功罪を天帝に告げるといふことは、民間では、かなり前からいはれてゐたことである。石湖居士詩集に見える范成大の臘月村田樂府十首の序に「臘月二十四日夜、祀竈、其說謂、竈神翌日朝天、白一歲事、故前期禱之、」とあ

り、その祭竈詞は「古傳臘月二十四、竈君朝天欲言事、雲車風馬小留連、家有盃盤豐典祀、猪頭爛熟雙魚鮮、豆炒甘鬆粉餌團、男兒酌獻女兒避、酹酒燒錢竈君喜、婢子鬪爭君莫聞、猫犬觸穢君莫嗔、送君醉飽登天門、杓長杓短勿復云、乞取利市歸來分、」といふのである。これは南宋時代において、今とほゞ同じことがいひ傳へられ、同じ祭が同じ意味で行はれてゐたことを、示すものである。唐代に書かれたものとせられてゐる輦下歳事記の逸文に、酒の糟を竈の口の上にぬりつけることが記してあるのは、やはり竈神を醉はせることによつて、天に上つてもほんとうのことを語らせまいとする、或は何もいはせまいとする、意味からであらう。天に上る日、從つてそれを祭る日も、年のをはりとしてあるように見える。また甫里先生文集に見える陸龜蒙の祀竈解に「竈鬼以時錄人功過、上白於天、當祀之以祈福祥、」を世俗の說として記してある。これには祀る日も祀りかたも書いてないけれども、禮典として竈を祀ることはよいが、世俗の說に從つて竈鬼を祀るべきではない、君子の道を行へば「雖歳不一祀、竈其誣我乎、」であり、小人の行ひをすれば「雖一歳百祀、竈其私我乎、」である、といつてゐるのを見ると、唐代にこゝにいつたような意味で竈神を祭るならはしがあつたことは、明かである。段成式の酉陽雜俎には、諸梟記のうちに「竈神、……以月晦日、上天、白人罪狀、大者奪紀、紀三百日、小者奪筭、筭一百日、故爲天帝督、使下爲地精、己丑日、日出卯時上天、禹中下行署、此日祭、得福、」とあるが、葛洪の抱朴子の微旨篇にすでに「月晦之夜、竈神亦上天、白人罪狀、大者奪紀、紀者三百日也、少者奪筭、筭者三日也、」と見えてゐて、酉陽雜俎に記してあることの前の半分はほゞこれと同じであるから、これは晉代からのいひ傳へであつたと解せられる。この說の後世のとちがふところは、天に上つて告げることが人のしたわるいことのみであつて、よいことにはかゝはりが無いのと、その「むくい」はたゞ罪の大小に從つてどれだけかの壽命がちゞめられることのみであるのと、この二つの點である。壽命のみが問題になつてゐるから、この裁斷を下すのは、天帝ではなくして、天にある司命の神であるように抱朴子には記してあるので、こゝにもまた後世のとの違ひがある（こ

のことは酉陽雜俎の說には見えてゐないが、罪の「むくい」としての罰について、壽命にかゝはることのみ記してあるのを思ふと、やはり同じような考がそれに含まれてゐるのであらう)。また抱朴子のにも酉陽雜俎のにも、天に上る日を月の晦日としてあるのは、後の竈君經などの說と同じであるが、祭る日についての酉陽雜俎の說は、臘月二十三(または四)日とする後のならはしとは違つてゐることにも、きがつく。しかしこれについてはなほ考ふべきことがある。

さて酉陽雜俎には、竈神が天に上る日にそれを祭ると福が得られる、としてあるが、その福が司命に對する竈神のしらせと關係のあるものかどうかは明かでない。天に上る日に祭るとある點から見ると關係があるようでもあるが、たゞ福とのみいつてあつて壽命のことが書いてない點から見ると、ないようでもある。のみならず、己丑の日に天に上るといふのが司命に罪狀をしらせるためとせられてゐるかどうかも、わかりかねる。が、よく讀んでみると、こゝに竈神の天に上る日を「月晦日」と「己丑日」との二とほりに記してあるのは、別々の說を一つにつなぎあはせて書いたからのことらしく、前の半分と後の半分とはもと〳〵つながりのないことのようである。さすれば、「己丑日」に關係させて說いてある福といふのも、司命の話とはかゝはりなくいはれてゐるのであつて、從つてそれは壽命のみのことではなからう。さすれば、後のはうの部分において祭れば福が得られるとしてある竈神は、人の罪狀を告げるといふ意味での竈神ではなく、あとでいふような、竈の神としての本來の性質においてのことと解せられる。(己丑の日とせられねる理由はわかりかねるが、地精とせられたといふことと共に、後にできた話らしい。晦日としたのは、一と月のをはりにその月のありさまを司命にしらせるといふ意味で、いはれたこととすれば、その理由はわかるが、これはさうではない。さうして抱朴子にも晦日と書いてあることから考へると、己丑の日とする說よりは晦日とするほうが前からいひ傳へられたことであらう。しかしこのことは、己丑の日に祭るのが本來の性質においての竈の神であることを妨げるものではない。)抱朴子には祭のことも福を得ることも書いてないが、竈の神を祭ることは古くか

らのならはしであり、さうして祭は何等かの意義での福を求めるためであつたから、葛洪の思想は別として、晉代においても、一般には、このことが行はれてゐ、それによつて福の得られることが信ぜられてゐたにちがひない。さうしてそれもまた竈の神としての本來の性質においてではなかつたらうか。たゞそれを祭る日がいつであつたかはわかりかねる。ところが、荊楚歳時記には十二月八日に竈神を祭ることが記してある。さうしてそこに、祭神が天に上つて人の罪狀をつげるといふようなことの記してないのを見ると、これもまた、さういふこととはかゝはりの無い、竈の神としての本來の性質においての、祭であらう。なほ溯つてたづねてみると、風俗通の祀典篇に「漢記、南陽陰子方、積恩好施、喜祀竈、臘日晨炊、而竈神見、再拜受神、時有黄羊、因以祀之、……家凡二侯、牧守數十、其後子孫、常以臘日祀竈、」といふことがある。これは竈神を祭ることによつて富貴を得たといふのであつて、この意味において福を與へられたことになつてゐる。さうしてその竈神はやはり本來の性質においての竈の神である。またこの話は、祭る日を臘日としてあるところに荊楚歳時記の説とつながりがあり、竈神の形を見たといふところに民間信仰としてのすがたがある。

しかし竈の神を祭ることは、漢代にはじまつたのではない。早く呂氏春秋の十二月紀に、戸・竈・中霤・門・行、の五つの祀を四季と中央にあててあつて、竈を夏の祀として記してある。祀についてこれらの五つを擧げ、またそれらを時季にわりあてることは、いろ〳〵のものごとを五行にあてはめようとする考から出たことであり、またこれは王の地位にあるものの祭祀として説かれたことでもあるが、それにしても、五つの祀が實際世間で行はれてゐたために、かういふことがいはれたのであらう。世間で行はれてゐた竈の祭が、事實、夏のしわざであつたにはかぎらぬが、竈を祭ることは、古くからの一般のならはしであつたにちがひない。シナばかりでなく、多くの民族においてその例のあることである。禮記の一篇であつて前漢時代に書かれたものとすべき祭法篇に、王が群姓のために七祀をたてるといふことがあつて、その七祀には、上にいつた五つと司命

と泰厲とが數へてあり、士庶人は一祀を立てるとして、それを戸または竈としてあるが、これは、政治的地位によつて祀にもちがひがあるといふ考によつて、思想の上でくみたてられた制度にすぎないことであるものの、王が群姓のために立てるとせられてゐる七祀のうちの一つとして、また士庶人の祀として、竈の記されてゐることは、やはりこの祀が實際の風俗において、從つてまた民間の宗教的儀禮としても、重く見られてゐたからではあらう。史記の封禪書に記してある、武帝の時に李少君といふものが祠竈のことを帝にすゝめたとか、少翁といふものが竈鬼のすがたを武帝に見せたとかいふのは、特殊の方術のことであらうが、しかしそれとても、竈の神を祀ることが一般のならはしであつたために、さういふ方術をいひたてるものがあらはれたにちがひない。このように竈の祭は古くから民間にも行はれてゐたことであるが、それは竈が家族生活において大せつなものであり、またそれが火をたくところであるからであらう。竈の神を炎帝としたり（淮南子の氾論訓、論衡の祭意篇）、祝融としたり（風俗通の祀典篇や逸文の殘つてゐる許愼の五經異議に引いてある說）、さういふことのいはれるようになつたのは、竈の神を火の神と見たからのことであらうが、さう見ることは漢代の知識人の附會であり、また炎帝なり祝融なりの名を出したのは、これらが五行のうちの火にあてられてゐたために、それをこゝにとりこんだまでのことである。これらのばあひには、炎帝も祝融も神として祭られるようになつた古の人と考へられてゐるが、漢代になつてはじめてあらはれたかういふ考によつて、竈の神の性質が示されるものでないことは、いふまでもあるまい。民間信仰としては、竈の神はおのづから竈の神であつて、火に緣は深いけれども火そのものの神ではなく、またもとより古の人を祭つたものではない。上に述べたように、食物をにたきする竈が家族生活において大せつであると共に、一般に神異なものとして考へられてゐる火のもえるところであるために、そこに神がゐるとせられたその神が、竈の神の本來の性質である。さうしてこのように家族生活に大せつである竈の神であるから、この神を祭ることが家において特に重んぜられ、重んぜられたがために、この神を祭ることによつて

その家のものに福が來ると考へられたのであらう。要するに、竈の神は竈にゐる神であり家族生活の神であつて、この性質は後までも保たれてゐる。その家の人々の行ひのよしあしを見てゐるといふのも、天に上つてのそのしらせによつてかれらの上に禍か福かが下るといふのも、そのためである。しかし、人の行ひをみてゐるとか天に上るとかいふことが、どうして竈の神について考へられるようになつたのであらうか。

禮記の祭法篇の、上にいつた七祀などのことを說いてあるところの鄭玄の注に「小神居人之間、司察小過、作譴告者爾、」といふことが見えてゐる。それによると、鄭玄は、竈神を含む七祀などの神を小神とし、その小神にはかういふはたらきがあると考へてゐたらしい。人のうける禍と福とは神の下すものであるとし、神がそれを下すのは、人の行ひのよしあしを神が見てゐてその「むくい」としてであるといふ考は、民間の宗教—道德觀念として、古くからシナ民族の間にもあつたにちがひなく、知識人において天監とか天罰とかいふことの考へられたのも、それが本になつてゐるのであらうが、「墨子」の明鬼篇に「鬼神之明」と鬼神の賞罰とを說いてあるのは、このような民衆の思想をほゞそのまゝにいひあらはしたもののようである。句芒の神が天帝の旨をうけて鄭の穆公の前にあらはれ、天帝は汝の德を賞して十九年の壽を汝に與へられるとつげた、といふ話もそこにある。句芒といふ神の名は知識人の思想において生じたものであるが、話そのものには民間信仰のすがたがある。儒家の考としても、國の興らんとし亡びんとする時に神が降つてその德または惡を觀るといふことが、左傳の莊公三十三年の話に見えてゐて、これは政治的意義をもたせた大がかりの考へかたであり、また德と惡とを主としたことではあるが、神が降るとしたところに、民間信仰のおもかげが見える。だから、人の行ひは神が見てゐるといふのは、廣く世に行はれてゐた考であつたと解せられる。さうして、人の行ひにはよいことよりもわるいことのほうが多いといふ事實、また人の心を動かすことは福よりも禍のほうが強いといふ人の心理からいふと、神に見られ知られるのはそのわるいほうのことであるように、考へら

れる傾きのあるのが自然であらう。鄭玄が「司察小過」といひ「譴言」といつてゐるのは、このためではあるまいか。（政治の上で災異といふことが漢代にいひはやされたのも、一つはこれと同じ理由からであるらしい。）また七祀などを小神といつてゐるのは、天地とか社稷とか山川とかいふような、知識人の思想において政治的意義を與へられてゐる神に對してのことであらうが、民衆の日常生活に親しい關係のあるもの、民間において祀られる神は、これらのいはゆる小神であるから、鄭玄がかういつてゐるのは、却つて民衆の思想に近いものと見られよう。（鄭玄のこの註は、王のたてるといふ七祀についてのことであるが、神の性質やはたらきは、實際の民間信仰におけるそれによつて考へたものと解せられる。）

さてこれは小神のすべてについてのことであるから、鄭玄のこの說では、人の行ひを見る神として竈神が特に考へられてゐるのではない。たゞ「小神居人之間」といふことが、竈神において最もよくあてはまることを思はせるのみである。さすれば、竈神にこのはたらきを與へたのは、やはりそれが家のうちにゐる神があるために、家の人々の行ひを最もよく見てゐる、と考へられたところにそのもとがあるのではなからうか。鄭玄は上に引いたことをいつたあとで「今時民家、或春秋祠司命行神山神、門戶竈在旁、」といつて、民間のならはしとしては、竈神はやゝ輕くとりあつかはれてゐるように書いてゐるが、竈神の性質から見ても、上に述べたように、祭法篇の七祀と一祀との說には民間信仰の反映があるように考へられる點から見ても、またかの風俗通に記されてゐるような話のあることから見ても、それを文字どほりに信じてよいかどうか、いくらかの疑ひはある。しかしそれはともかくもとして、竈神が人の行ひのよしあしを見てゐるといふことの由來は、たぶんかういふところにあるのであらう。たゞそれがいつからいはれてゐたことであるかは問題であつて、今のこつてゐる漢代の文獻には、特に竈神についてかういふことの記してあるものは、見あたらないようである。しかし、もしかすると、それは先秦時代からのことであつたかもしれぬ。次に考へることによつてさうも見られるようである。

その考を誘ひだすものとして、こゝに一つの問題があるが、それは、竈神が天に上るとせられたことの由來である。これについては文獻の上にそのしるしを求めることはむつかしいから、別の方面から考へてみるほかはない。そこで推測するに、竈は火のもえるところであつて、そこから烟のたちのぼることが、かういふ想像を生み出したのではあるまいか。地上で焚いた火の烟が天に上り、その烟によつて地上のものが天にとゞく、といふ考のあつたことは、燔柴の禮の行はれてゐたことによつても知られるから、それからもこのことが類推せられはしまいか。燔柴は天を祭るばあひのしかたであつて、そのことは、祭法篇に見えてゐるし、「周官」にも同じようなことが書いてあるが、それは漢代に實際行はれた郊祀の儀禮に本づいて記されたことであらう。そのもとの意味は、犧牲をやいた烟を天に上らせることによつて、犧牲を天にとゞくようにするところにあるらしい。だから、儒家の禮として定められた天子のつとめとしての郊祀でなくとも、天を祭るには燔柴するのが古くからのしかたであつたと考へられ、前漢時代においても、やはりそれがどこかで行はれてゐたようである。禮記の禮器篇に、奥に燔柴することを禮にそむいたしわざとした孔子のことばといふものが記してあるが、禮であるかないかは別として、かういふことが行はれてゐたために、このような孔子のことばが作られたのであらう。（鄭註によれば「奥」が「竈」となつてゐる本もあつたといひ、現に風俗通に引いてあるものにはさうなつてゐるが、竈は常に火をたくところであるから、そこで特殊な祭祀の儀禮としての燔柴をするといふのは、解しがたいことである。鄭玄は「奥」は「爨」の誤だらうといつてゐるが、なぜさう考へたかの説明には、わかりかねるところがある。もとのまゝの「奥」でよいのではあるまいか。竈と書いたのは、燔柴の意義をわすれて、その文字だけを見たところから生じた錯覺のためらしく、鄭玄の考もそれに導かれたものであらう。）ところで、その奥が何であるかといふと、それについて思ひ出されるのは、論語の八佾篇の「王孫賈問曰、與其媚於奥、寧媚於竈、何謂也、子曰、不然、獲罪於天、無所禱也、」といふ一章である。この問と答とをてらしあはせてみると、「不然」は竈よりも奥が

重いといふ意義であり、從つてまたその奥は、神としての天と關係があるものとしなければならぬ。さうして、このばあひの竈は竈神、もしくは竈神のゐるところ、をさしたものにちがひないから、それに對していはれてゐる奥は、天を祭るところをいふのではあるまいか。さう考へると、禮器篇の奥に燔柴するといふのが、よくそれにあてはまることになる。それを孔子に非禮といはせたのがなぜであるかは、明かでないが、その次に奥は老婦の祭であるといふことがいつてあるのを見ると、もとは奥の祭は燔柴して天を祭ることであつたのが、後になつてその意義がかはり、老婦の祭とせられたために、もとのならはしに從つて燔柴をすることが、却つて非禮と考へられたのではあるまいか。さうしてこのように意義がかはつたのは、或は、儒家の禮の說において、天を祭るのは天子のことと定められたためであるかもしれぬ。禮器篇は前漢時代に作られたものであり、論語のこの一章の書かれたのは、先秦時代の或る時期であつたので、その間にかういふ變化があつたのではあるまいか。（禮器篇の孔子のことばといふものは、いふまでもなく、前漢時代に作られたものであるが、論語のこの一章の問答も、孔子の時代から傳へられたものとは見なしがたい。）さてこのように考へることがもし許されるならば、前漢時代においては、儒家の禮としては、燔柴して天を祭ることは天子のほかには認められなくなつたけれども、實際にはそのならはしがなほどこかに殘つてゐて、奥の祭としてそれが行はれてゐたように、思はれるのである。さうしてかういふことが行はれてゐたとすれば、烟は立ちのぼつて天にとゞくものと思はれてゐたことも、また知られるので、竈神の天に上るといふ想像が、竈の烟のたちのぼることによつて誘はれた、といふ推測のむりでないことが、わかるのではあるまいか。これは前漢時代の文獻によつていつたのであるが、近ごろのならはしとしても、竈神を祭つた後にはその像を焚くので、それは神が天に上るのを送るためだといはれてゐるが（日下舊聞考）、これもまた立ちのぼる烟を天にとゞくものとしての考であるかもしれぬ。このならはしは昔からのことではなく、またそれは竈の神が天に上るとせられたことの由來とはかゝはりの無いことであるが、烟を天にとゞ

くものとする考へかたは、それと同じではあるまいか。シナ人のしわざにも思想にも、特に呪術宗教的なそれにおいては、今も昔もかばらぬことが多いのである。

さて燔柴して天を祭ることは遠いむかしからのしきたりであり、烟を天に上るものとするのも、原始的の考へかたであるから、竈神が天に上るといふのも、或はかなり古い時代からいひ傳へられたことであるかもしれぬ。論語に天と竈の神とをくらべていひ、またその間に何か關係がありげにいつてあるのも、その根柢にこの考があるのではないか、とさへ臆測せられもする。さうして天に上ると考へられたとすれば、何かのしごとがそれに伴はねばならぬので、それによつてさらに臆測をすゝめるならば、竈の神が天に上つて人の行ひのよしあしを天につげるといふことが世間でいはれてゐて、そこからまた、天のごきげんをとるよりは竈の神のごきげんをとるほうがきゝめが多い、といふことわざさへもできてゐたために、そのことを孔子にたづねたら、さうではない、天のごきげんを損じたらもう禱りようが無いから、何よりも天を敬はねばならぬ、と孔子が答へた、といふのが、この一章の意義ではないかと思はれもするのである。これはもとより臆測の上に臆測を加へた解釋であるから、當つてゐるかどうかわからぬが、王孫賈がその意義をたづねたといふことばは、世間にいひならはされてゐたものと解せられ、さうしてさういふことがいひならはされたのは、竈神のはたらきに何かおそろしいことがあり、さうして、この神をみかたにしておけば天はどうにでもなる、といふことが考へられてゐたからであらうと思はれるし、「媚」といふようなことばのそこに用ゐてあるのも、まじめな宗教的感情をいひあらはしたものらしくは聞えないから、このような解釋もせられるのではあるまいか。もしさうならば、上にいつておいたように、竈神について後世にいはれてゐるようなことは、先秦の時代からすでにいひ傳へられてゐたかもしれないのである。このことについては、上にいつた「墨子」の明鬼篇の句芒の神のあらはれた話の、神が天から下りて來たといふこと（從つてまた歸るばあひには天に上つてゆくといふこと）、天帝が人の形をもつて

ゐるように見えること、またその天帝が人に德行のあるのを知つて福をその人に與へたといふこと、などが考へあはさるべきであらう。

竈神が人の行ひのよしあしを見てゐて、天に上つてそれを天帝につげる、といふことの由來は、このようなところにあらうと思はれるが、さういふことの明かに記されてゐる抱朴子には、上にも一こといつておいたように、つげるのはわるいことのみであり、またそれは天にゐる司命の神に對してであつて、人のうける罰も壽命に於いてであることになつてゐる。わるいことのみとせられたことの一般的な理由としては、上に鄭玄の祭法篇の注について考へたところによつて、おのづから知られるであらうが、抱朴子に記されてゐる說においては、それについてまた特殊の理由もある。さうしてそれはまた、わるい行ひのためにうける禍が壽命のちゞめられることとせられた理由でもある。もと〳〵このことの記されてゐるのは、長生不死の道をいふばあひにおいてであつて、僊人になるにはその道を修めると共にまたよい行ひをもしなければならぬ、といふことがそこに說いてあり、さうしてそれを說くにつれて、竈神のことが思ひ出されてゐるのである。竈神のことは見えてゐないが、對俗篇にもまた、上天の司命の神が人の罪過を見てその人の壽命をちゞめるといふことが記されてゐる。長生不死にはおのづからその道があるが、よしその道を修めても、道德的にわるい行ひをすれば、このようにして壽命がちゞめられるから、道を修めたかひは無く、僊人にはなれない、といふのが、そこでいつてあることのおほよその意義である。だから、司命のしわざとしては、長壽を得させることをいふにはおよばず、その反對のことをいへばよいのである。從つてまた、世間のいひ傳へとしては、抱朴子の時代においても、竈神の天に上つてつげることが人の行ひのわるい方面ばかりとせられてゐたのではなかつたけれども、抱存子にはこの方面のことばかりが記されてゐるのかもしれぬ。竈神のことの記してあるのと同じところに、人の身のうちにある三尸が、庚申の夜に天に上つて人の罪過を司命につげる、といふ說ものせてあるが、三尸は「欲使人早死」する

鬼神のたぐひとせられてゐるから、かういふしわざをするといふのも、自然であらうが、竈神はそれとは性質がちがふから、このように考へられるのである。（三尸が天に上るといふのは、身のうちにあるものが身をぬけ出してどこにでも「遊行」する、と考へられてゐたために、それを天にまで上らせることにしたのであらう。）抱朴子の思想がもしかういふものであるとすれば、そこに祭のことが書いてないのも、またそのためであるかもしれぬ。長壽を得るには、僊家にその道があつて、竈神にたよるにはおよばないからである。さすれば、かの酉陽雜俎の前のほうの半分に、抱朴子にあるのと同じことが記してあるのも、神僊家の方面でのいひ傳へがとられたものと解せられる。上に記した陸龜蒙の祀竈解に「錄人功過」とあり、また祭によつて福を祈るとあることを、思ひあはすべきであつて、これがそのころの普通の考へかたであつたらう。後のほうの半分に記してあることが、神僊家とは別の方面で行はれてゐた說であり、また天に上つて人の行ひのよしあしを告げるといふのとはちがつた意味での竈の神の祭である、といふことは、上にいつておいた。さうしてそれは六朝時代においても同じであつたことが、荊楚歲時記に上にいつた陰子方の話が引いてあるのでも知られよう。ついでにいふ。司命は、占星術としてのいはゆる天文の說においては、北斗の傍にある文昌宮の六星のうちの一つとなつてゐるが、禮記の祭法篇の七祀のうちに數へてある司命がそれであるかどうかは、明かでない。春秋緯の佐助期に司命神の名とすがたとが記してあつて、それによると人の形をもつてゐるように思はれてゐたらしく見えるが、それとても星の神であるかないかはわからぬ。風俗通には、民間で司命を祭ることと、それには人の形をした木像を用ゐることとが、記されてゐるが、それを文昌星のことのようにいつてあるのは、書物の上の知識をつなぎあはせたまでのことらしい。抱朴子に見えるものも、また星であるかどうか、同じようにわからぬが、たゞ天にゐる神であるにはちがひない。一方では、佛教のひろまるにつれて、地下の冥府が人の生命を司るように考へられ、その冥府を主宰するものが泰山府君であるようにいはれてもゆくと共に、天にゐる神としての司命のあることも、シナ人の思想に

消えうせはせず、道教がなりたつてからは、いろ〳〵の形においてその司命がとり入れられることになるのである。（道教において泰山を利用したばあひもないではないが、それは稀な例のようである。）

以上は、近代のシナの民間信仰における竈神の性質とそのはたらきと、並にそれに對する祭の意味との由來を、上代までさかのぼつて考へたのであるが、それを一くちにいふと、竈神は第一に竈の神としてのもとの意義において、第二に天に上つて人の行ひのよしあしを天につげるといふ特殊のはたらきをするものとして、見られてゐた、このうちの第二のほうは、一般的には人の行ひのよいのとわるいのとの二つについてのことと考へられてゐたが、神僊家の方面では、わるいことのみとしても說かれてゐた、またこの神を祭ることは、第一のに對する意味でも第二のに對する意味でも行はれたが、たゞ神僊家においては祭のことが重んぜられなかつたかと思はれる、また祭によつて得られる福は、第一のにおいても第二のにおいても、富貴と長壽とがその主なものとして考へられてゐたに違ひない、なほ第一の意義でのこの神に對する祭は、極めて遠い昔から行はれたのであらうが、第二の意義でのこの神のはたらきの信ぜられたのも、或は先秦時代からのことであるかもしれぬ、ほゞかういふことになるのである。

しかし、上代において竈神がどのようにして祭られたかといふと、その詳しいことはわからぬ。遠い昔には祭といふよりもむしろ呪術的な儀禮が行はれたことと推測せられるので、それには何かの犧牲が用ゐられたかもしれぬが、明かでない。風俗通に陰子方が黃羊を以て祀つたとあるのは、或はそのなごりかとも思はれる。荊楚歲時記には豚酒を以て祀るとあるが、これは晉代のならはしであらう。（なほこの書には陰子方の話を「以黃犬祭之、謂爲黃羊、」としてあるが、どうしてかうしたのか、わからぬ。）范成大の詩にも酒肉を供へたことが見えてゐるから、かういふことは少くとも南宋ころまでの一般のならはしであつたらしい。これは祭のしかたのことであるが、竈または竈神には、なほ呪術めいたことがさま〳〵に附會せられてゐ

たらしい。隋書の經籍志に竈經十四卷の名が見えてゐることによつても、それが知られる。この書が五行の部に記してあることから考へると、方術ともいふべきことを記したものであるらしく、六朝時代に作られたものであらうが、そのうちには竈神の祭に關する何ごとかの記されてゐる部分があつたかも知れぬ。しかしその書は今はなくなつてゐる。（別に祠竈書一卷の名が記され、「亡」としてあるが、舊唐書の經籍志には祠竈經一卷があつて、十四卷の竈經といふものは見えない。）たゞこのような書の作られてゐたのを見ると、竈もしくは竈神について、呪術宗教的なしわざや思想やのいろ〳〵に附會せられてゐたことは、思ひやられる。これもまた竈神が重んぜられてゐたからであらう。

ついでにいふが、竈神は目に見える形をもつてゐるように考へられてゐたので、陰子方の話にあるのもそれであるが、後漢書の陰興傳のこの話の記してあるところの注に引いてある雜五行書には「名禪、字子郭、衣黃衣、夜被髮從竈中出、」と見えてゐる。また荊楚歲時記には「姓蘇、名吉利、婦姓王、名摶頰、」とあり、酉陽雜俎には「名隗、如美女、又姓張、名單、字子郭、夫人字卿忌、……一曰、竈神名壤子也、」と記してある。神がそれ〴〵人のような姓名をもつてゐるといふことは、緯書にもすでに見えてゐることであり、道教の書には、多くの神についてそれが說かれてゐるが、竈神にもまたそれがこのように思ひ〳〵につけられてゐた。竈神を炎帝だとか祝融だとかいふように說くことも、後まで行はれてゐるが、これはたゞ漢代の書に記してあることをそのまゝにうけついだだけであつて、一般にはこゝに引いたように考へられてゐたのであらう。しかしこれは、かならずしも神に人間性を與へたものではない。雜五行書の說では、竈神は、人のような形をもつてゐながら、むしろ一種の幽鬼のように感ぜられるので、この說から離れて考へても、竈鬼といふことばの用ゐられるばあひのあるのは、やはりそのためであらう。一くちにいふと、それは精靈、もしくは精靈の形をあらはしたもの、なのである。竈のなかにゐるものとせられたとすれば、それが自然である。後世のならはしにおいて、竈の口に糖をぬりつけて、それで神の口があかないよう

になると思はれてゐるのも、また神が烟にのつて天に上るように考へられてゐるとすれば、その點でも、竈の神は人の形をもたない精靈としての鬼神であるが、これはむかしからの考へかたのうけつがれてゐるのであらう。人のやうな姓名をつけられたり、または妻をもたせられたりしたのは、一つは、天に上つて天帝に語るとせられたところからの、また一つは、多くの神をそのようにするとりあつかひかたがこの神にもあてはめられたからの、ことであり、一種の擬人が施されたのであるが、それにもかゝはらず、精靈たり幽鬼たる性質は保たれてゐたようである。何等かのありかた、何ほどかの程度で、鬼神に人のおもかげを見ることは、どの民族においても普通なことであり、現實に存在する人がすべてのものの模型であるシナ民族においては、その意味からも神を擬人することが行はれたのであるが、しかしシナ民族のこのしかたは、人の形をもつた神の像を、神の性質とはたらきとによつて特殊性をもつ具體的な形に於いて、明かに思ひうかべたものではない。その擬人は、いはば抽象的なものである。神は擬人せられながら、やはり鬼神であり精靈である。道教においてはいろ〳〵の天體や人の肢體器官などに人のような姓名をもつた神がゐるごとく說かれてゐるが、その神もまたそれらのものにゐる精靈であることを、思ふあはすべきである（そのうちには何等かの形をもつたものもあるが）。竈神は後には竈君とも竈王ともいはれ、衣冠をつけた人の像によつて示されてもゐるが、それは擬人せられた一面の發展したものであつて、他の一面においては精靈の性質が保たれてゐて、祭のしわざの上にそれがあらはれてゐる。だから、神が擬人せられてゐても、それはかならずしも神に具體的な、また明かな、人の形を與へたものとして見るべきではないのである。

さて、このように見て來ると、竈神の性質もはたらきも、またそれを祭る意味も、昔と今との間にさしたる違ひの無いことがわかり、それと共に、この神のはたらきとして考へられてゐることによつて知られるシナの民族の道德觀念についても、また同じことがいはれるようである。たゞ、祭のしわざやその時期については、時代によつていろ〳〵の變化があつたらしい

が、それらとしても南宋時代には、ほゞ今のようなしきたりが生じてゐたように見える。范成大の詩には酒肉を供することが叙してあるのに、今は、一般にたゞ糖果の類を用ゐるといふようなちがひはあるけれども、男のみが祭にあづかつて女はたづさはらぬようにこの詩にいつてあることは、今でもそれと同じである。（女がたづさはらぬといふ風習の生じた理由については、考が無い。）

ところが、こゝで一おう考へておかねばならぬのは、道教における竈神のとりあつかひかたである。道教の諸神の系列においては、竈神は殆どその地位をもつてゐないので、それは竈神の信仰が、道教の主とするところとは、もと〳〵かゝはりのないものだからであらう。道教で人の行ひのよしあしを天につげるといふことがいはれてゐるにしても、それを竈神のしわざとしてゐるには限らないことを、思ひあはすべきである。雲笈七籤の雜戒を説いてあるところに、人の口の左と右とに「司陰の神と司殺の神とがあつて、人の陰禍と悪言とを天または天にある司命につげる、」といふことが見えてゐるのでも、そのことは知られる。たゞ道藏の洞眞部に安竈經といふものがあつて、それに竈神のことが説いてあることには、きをつけなくてはならぬ。この經には十二月二十三日（もしくは二十四日）の祭のことは記してなく、竈神そのものにも、これまで見て來たのとは、いくらか違つたおもかげがそれに見えてゐる。この經がいつ作られたものであるかは明かでないが、道教において上に述べたような地位にある竈神のために、特に經が作られたといふのは、後世のことであらうと考へられ、さうしてそれは、その内容の上からも知られるようである。この經は、炊母神母が太上元始天尊に對して、われらは人の間にあつて五帝司命の官となり、世人の功過を錄する任務をもつてゐて、月の晦朔に天に上るのであるが、世人は過が多いから、このことを上言してみこゝろをうかゞふ、といつたので、天尊がそれに應じて説いたことになつてゐる。司命の官と稱せられてゐる炊母神母といふものが竈神の分身であることは、天尊に上言したといふことばからだけでもわかるが、經の本文に「司命竈君」といつてあ

り、竈君が司命となつてゐるのを見ても、そのことが明かに知られる。また司命と竈神とは、もと〳〵別の神であつて、それは上に考へたところからもわかることであり、特に道教では一般に司命を天にゐる神としてあるのに、こゝではこの二つが一つの神に結びあはされてゐる。このように竈神の分身を作つたりそれを司命と一つにしたりしてあるのは、この經が後世の作であることを示すものであらう。もつとも、上に引いた輦下歳時記に竈の口に糟をぬりつけることを記して、「謂之醉司命」と書いてあるのを見ると、この書の作られた唐代に竈君を司命とした說があつたようであるから、このことは唐代から世に行はれてゐたのであらうか。かういふように竈神と司命とを一つにしたのは、抱朴子に見えるような神僊家の說にもとづきながら、それに一轉化を與へたものであるから、道教の方面で考へ出されたことに違ひなく、從つてそれが唐代からあつたとしても、さしつかへはない。しかし安竈經が後世のものであることは、竈神の分身が作られてゐることだけから見ても、疑ひは無からう。

さてこの經の本文において、天尊の說いたようにしてあることは、竈君は淸淨を好むから、飛禽走獸の毛などを竈にふれないように、また不淨の薪や水を用ゐないようにし、また高聲大語をせず、さうして每月の吉旦良夜に、香を焚き酒果を供養し、司命の主、神女の靈、を祭れば、家がよく齊つて長生不死を得る、といふのであるが、この經を讀んで特にきがつくのは、腥膻をきらふといふこと、祭るについても肉を用ゐないといふことである。はじめの炊母神母のことばのうちにも、「變飮血茹毛之化、就鍊生還熟之餐、」が、その任務の一つであるようにいつてある。肉食は一般のシナ人の普通のならはしであるのに、かういふことが說いてあるのは、道教で道を修めるものには肉食を禁じてあるからであらう。さうして、祭るに肉を用ゐないようにいつてあるのは、竈神の祭に肉を供するむかしからの世間のならはしを斥け、その代りに道教で神を祭るしかたによつて祭をさせよう、といふ意味からではあるまいか。道教で神を祭るに肉を用ゐないことは、いふまでもないからであ

る。さうして、もしこの經の作られたのが後世のことであるとするならば、もう一あし進んで、この經には、かの十二月の祭を斥けようとする意圖が含まれてゐると考へても、まちがひはなからう。天に上ることがいつてあるにかゝはらず、それを十二月のこととしてないのも、抱朴子に見える說によつて月の晦日をその時としたのも、そのためらしい。このことについては、太上感應篇に同じ抱朴子によつて同じことのいつてあることが、考へあはされる。（本文には晦朔としてあるが、朔は晦のつゞきとしていつたのか、または晦といつたために意味もなく朔とつゞけたのみのことか、いづれかであらう。）さてこのような經の作られたのは、道教が、といふよりはむしろ道士が、竈神の民間信仰を自己の領分にとり入れようとしたためのことと解せられるので、城隍神とか關帝とかいふ神、または民間のいろ／＼の呪術、などをとり入れたのと同じ例であらう。道教のいろ／＼の懺法で唱へることになつてゐる多くの神々の名の最後のほうに、城隍神や司命竈君尊神の名が、つけたしのようにして、擧げてあるばあひが稀にあるが、（いはゆる太上懺法など）、これもまたこのことを示すものである。竈神を加へるにしても、それがこのようなしかたにおいてであり、またその例の少いことに、意味があるのである。

ところが、道士のこの態度は、今民間にひろがつてゐる竈君福壽經において、うけつがれてゐるようである。この經のはじめには竈君が司命であるように記されてゐ、また十二月の祭のことはいはず、家のものの行ひのよしあしをつげるために天に上る日を月の晦日とし、またをはりの偈らしいものに「八月初三日、齋戒沐浴身、虔備清茶供、慶祝竈三神、」とあるからである。司命と晦日とのことは上に述べたが、齋戒沐浴は道教で神を禮するばあひに行ふべきこととせられてゐるし、供へるものが清茶であるのも、腥膻をきらふ道教にはふさはしいことであるのみならず、實際にも道教において行はれてゐることであり、さうしてまた「竈三神」とあるのも、竈君と炊母神母とをさしたものとすれば、その意義がわかるようである。この經には閻王の地獄のことや輪廻のことも記してあるが、これは近代の道教の經典に佛教の思想や佛の名などをさま／＼のしかたで

とり入れてあるのと同じであらう。（道教そのものが佛教の形を學んだことによつて成りたち、佛教からとり入れられた分子のそれに多いことは、いふまでもないが、こゝにいふのはそのことではなく、佛教に對立するものとしてすでに成りたつてゐる道教が、さらに佛教と結びついたことをいふのである。）さすれば、この經が道士によつて書かれたものであることは、おのづから知られる。たゞこの經の作られた時代はわからぬが、道教の經典としての形を具へてもゐず、道藏のうちにも加へてないのを見ると、安竈經よりもずつと後に書かれたものらしい。安竈經には見えてゐない八月三日の祭のことの記されてゐるのも、またそれを示すもののようである。安竈經には吉日良夜とあるのを、このように日を定めたところに、竈神の祭を道士の領分にとりこむについての一歩進んだ意圖が見られるのではなからうか。この經にはこの日がどういふ日であるかは說いてないが、竈君經（竈王眞經）にはそれを竈神の生まれた日としてあるから、この經においてもやはりその意味が含まれてゐるのであらう。が、かう考へると竈君經に說いてあることを一おう見ておかねばならぬ。竈王經にもまた十二月の祭のことは記してなく、天に上る日は月の晦日としてあり、さうして竈君を祭る日をこの神の生まれたといふ八月三日としてある。この日を竈君の生まれた日とするのがなぜであるかは知らぬが、この日に祭をするのと十二月にするのとは、その意味が違ふ。十二月は一年のをはりであるから、竈神の天に上るのがその月のをはりに近い二十三日か二十四日かであるといふのは、一年のうちの人の行ひのよしあしを天につげるためのこととしては、ふさはしい時期であり、月々に天に上るとせられたばあひにその日を晦日としてあつたのと、同じ考へかたからである。さうしてその日の、神が天に上るすぐ前に、家々でこの神を祭るのは、すでに述べたような意味においてのこととしては、やはり適切なしわざである。しかし八月三日は竈神の天に上る日ではないから、この日の祭にはさういふ意味は無いように見える。さすれば、同じく十二月の祭をいはず、八月三日に祭をすることの說いてある福壽經の考へかたにおいても、またこの點は同じであらう。しかし二つの經には同じでないところもあるから、次

にそのことを考へてみよう。

竈君經（竈王眞經）は、そのはじめに「這一部竈君經、何人留下、有西天老古佛、著在藏經、唐三藏去取經、帶來東土、傳流到普天下、苦勸衆生、」といつてあり、をはりの偈に「持佛法、衆善奉行、」の句があるのみならず經のうちにも「神聖」または「天地」と共に「佛祖」をいひ、「不老長生」と共に「證佛果」をいつてあるのを見ると、佛教のにほひの甚だ強いものであることがわかる。近代のシナの民間信仰としては、もとからのシナ人のそれと通俗化せられた佛教の知識とが、さまざまのすがたにおいてまじりあつてゐるし、上に述べたように、道教とてもまた佛教からいろ〳〵のことをとり入れてゐる。しかし竈君經のは、たゞそれだけのことにしては、あまりに佛教の色どりがこくなりすぎてゐる。經そのものを佛が說いたことにしてあるからである。だから、これは、竈神についての民間信仰を佛家にとり入れ、それを佛教化しようとして、佛家の作つたものではあるまいか。「玉皇」の名や「不老長生」の語も見えてゐるが、それは竈神の信仰が道士の領分にとり入れられてゐるために、このようなことがそれについていはれてゐたのを、そのまゝ佛家が用ゐたものと見られよう。ところで、このように竈君經が佛家の手によつて作られたものであるとすれば、十二月の祭のことがそれに見えないのも、この祭のならはしが佛家のしわざらしくないものであるからのこととして、解せられよう。八月三日の祭についても、一方では「祭祀」といふ語を用ゐながら、また「香火供養」とも「點明燈」ともいつてあるが、香をたき燈をともすことは道教でも行ふ禮拜のしかたであり、一般のならはしともなつてゐることであるから、これはかならずしも佛家の說とのみいはれなからうけれども、佛家にふさはしいことばではある。さうしてこのことばは十二月の祭のしわざには、ふさはしからぬものである。のみならず、經に「竈君神聖誕日、人不祭祀、守東厨甚寂寞、冷々淸々、」（または「坐東厨太冷淡、寂寞無情、」）といつてあるのを見ると、この經の作者は、十二月の祭を斥けて八月の祭を盛にしようとしたもののようにも、解せられる。（東厨は竈神のゐるところで

あらうが、なぜ東とせられたかといふことは、なほ考へてみねばならぬ。）また竈神の天に上るのを十二月とせず、むかしの書もつによつて月の晦日としたのも、この經としては、そのためとして見られよう。しかし八月三日に竈神を祭ることがこの經の作者によつてはじめていひだされたことであるには限らぬ。關帝を六月二十四日に、文昌帝君を二月三日に、また觀音大士を二月十九日に、祭るのは、それらの神々の生まれた日を祭の日としたのだといふことであるから、竈神についてもまた同じことが前からいはれてゐて、竈君經の作者はそれに從つたものであるかもしれないのである。（神について生まれた日を定め、その日にその神を祭るといふことは、古くからのシナ人のならはしとは思はれぬから、これは、もとは、シャカムニの生まれた日にこのブダを禮拜する佛家のならはしが、學ばれたのではあるまいか。しかし竈神についてそれがはじめて行はれたのではなからう。）たゞこの經の作られた時には、八月の祭は十二月のほどには廣くも盛にも行はれてゐなかつたことが、ここに引いた經の辭句によつて推測せられるのである。

さてこれは、竈君經を一おうそれだけのものとして見たのであるが、それと福壽經とをひきあはせて見ると、十二月の祭を記さずして八月の祭を說くことは、二つとも同じであるから、福壽經においてもまた十二月の祭を斥けて八月の祭を主張する考へのあることが、推測せられる。さうして二つの經のあとさきを考へると、道士の手になつた福壽經またはそれと同じような思想によつて書かれたものが先づできてゐて、それをもとにして、佛家の作つたのが竈君經であるように、見える。竈神についての民間信仰を道士がとり入れたのは、安竈經においてすでに行はれてゐたことであるから、佛家が竈君經を作つたよりも前に、福壽經もしくはそれと同じようなものが道士によつてすでに作られてゐた、と見るのが自然だからである。さうしてかう考へると、竈君經に道教のことばの用ゐてある理由も一層よくわかつて來るし、上に述べたように八月三日の祭をいふのがこの經よりも前からであつたと考へ得られるといふことも、またうけがはれることにならう。竈君經の作られた時代もまたわ

からぬが、その文體だけから考へても、この經は新しいものとしなければなるまい。民間にひろめられた竈神に關する通俗的な經はこの二つに限らず、ほかにもあつたのではないかとも臆測せられるが、この二つの經の思想によつて考へる限り、世間に廣く行はれてゐる十二月の祭を斥けて、八月の祭を起しまたは盛にしようとする企てが道士の間に生じ、それをまた佛家が利用したことは、ほゞ推測せられるようである。さうして南宋時代には十二月の祭が一般に行はれてゐたとすれば、かういふ企てはそれよりも後になつて生じたものであり、從つて二つの經の作られたのは、この點からも、近代のことと考へられる。佛家がこのような形で、道教にとり入れられた民間信仰をさらにとり入れ、または道士と佛家との間にこのような結びつきが、民間信仰との關係について、行はれたのも、近代のことと見るべきであらう。

このように道士や佛家が十二月の祭を斥けたとすれば、八月三日に祭をするのは何のためであるかといふと、竈君經にはそれによつて福壽が得られると書いてある。福壽經にはさう明かに記してはないが、祭ることにその意味があるにはちがひない。さすれば、竈神が天に上つて人の行ひのよしあしを天帝につげるといふ、二つの經のどれにも說いてあることと、竈神を祭ることによつて福壽を得るといふこととの間に、どういふ關係があるとせられてゐるか、といふことが問題になるが、晦日に天に上ることが經に記されてゐると、行ひのよしあしにむくいのあることが說いてあるのと、この二つの點から考へると、祭る時期は八月三日とせられてゐるにせよ、やはりこの神が天に上つて人の行ひのよしあしを天帝につげるといふことがもとになつてゐるものと、解せられる。竈君經には、竈君を敬すれば、人々の地位や職業などに應じた福利がそれ〴〵に得られること、またまづゝろで祝禱すれば天帝に「好話」が多く語られることが說いてあつて、それはかならずしも八月三日の祭についてのみいはれたことではないように見えるが、その日の祭についてもまた同じことが考へられてゐたであらう。福壽經にはこの點についても明かなことは書いてないが、祭をせよとある以上、同じ考が含まれてゐるものと推測せられる。のみなら

ず、十二月の祭が一般に行はれてゐる時代に作られた經であるから、その祭にあらはれてゐる竈神に對する態度も、その態度にあらはれてゐる道德觀念も、またおのづから經の作者によつて承認せられてゐるのであらう。道家にしても佛家にしても、一層高い道德的見地からそれを批判することはできなかつたに違ひないからである。敬すれば福利を與へられ禱れば好話を天帝に語つてもらへるといふのは、よい行ひをすることによつてそのような效果が得られるといふのとは違ふが、この二つがいりまじつて說かれてゐるのでも、そのことは知られる。十二月の祭を斥けたのは、その祭の意味を非としたためではなくして、祭のしかたが道敎または佛敎のそれと違つてゐるからであらう。道士や佛家が竈神の祭をかれらの領分にとりこむには、かれらのならはしにあてはまるようにそのしかたを變へることが、おのづから求められたにちがひないからである。八月三日といふ日を定めまたはそれを利用したのも、この變形の一つの方法であつたと考へられる。

ところで、こゝに一つきをつけてみなくてはならぬことがある。竈君經にも福壽經にも、厨中の十戒といふものが記してあつて、竈に對して、してはならぬことが擧げてある。二つの經では同じことでもいひかたに違ひがあり、一つのにあつてほかのにないこともあるが、おしなべてみると、ほゞ同じような禁制である。いま一々それをならべあげるにもおよばなからうが、竈をよごしたり、その火できたないものをあぶつたり、またはその前で泣いたり罵つたり、呪ひごとをいつたり、はだかでゐたり、五穀をすてたり、故なくしていきもの、特に耕牛の肉、を煮たりしてはならぬ、といふようなことであり、要するに、竈を淸らかにし、謹んでそれをとりあつかはねばならぬといふのであつて、それを守れば竈神が福を與へるから、富貴福壽が得られるが、もしそれを犯せば神が禍を降すとせられるのである。竈は家族生活において大せつなところであり、火をもやすところであり、いはゞ家のうちの神聖なところであるから、かういふような禁制のいくらかは遠いむかしからいはれてゐたと考へられるので、抱朴子の微旨篇に「跨竈」を（「越井」と共に）罪としてあるのも、その一つの例である。ところが、上

に擧げた十戒のうちにはかなり特殊なものもあるので、それには何か別の由來があるのではないかと考へられる。といふのは、雲竈七籤の雜戒を說くところに「向竈罵詈」を不祥の一つに敎へてあり、玉淸經に示してある十戒を記すところに「不得裸露」が見え、また太上感應篇に「對竈吟咏及哭」、「夜起裸露」、「散棄五穀」、「非禮烹宰」、などを罪としてあるのを見ると、それは道敎の訓戒にもとづいたものらしいからである。上に述べた安竈經の說の精神がそも〳〵同じところにあるのである。「十戒」として敎へることも、また道敎から來てゐるのであらう（道敎で十戒をいふのが佛敎のを學んだものであることは、いふまでもないが、それはこゝのばあひにはかゝはりが無い。）なほ肉食のことについては、陰隲文にも「持齋而戒殺」がよいことの一つに數へられ、また「勿宰耕牛」の一條があり、十戒切過格にも「殺大命」を重い過としてあることが、思ひあわされよう。かう考へることにもし理由があるとするならば、これは、竈神が天に上つて人の行ひのよしあしを天帝につげるといふこととは別に、竈の神、もしくは竈そのもの、に對するこのような十戒が道士によつて作られてゐて、それがいくらかづゝ違つた形で世間にひろまつてゐたのを、二つの經の作者が思ひ〳〵にそのうちの一つをとつて經に書きあらはしたことを示すものであらう。さうしてこのことは、二つの經は道士の手になつたものがもとになつてゐるといふ、上に考へたことを、證するものともなるであらう。或は十戒を說いただけの經があつて、それが二つの經のもとのすがたであつたと見てよいかもしれぬが、さう見るべきものとは限るまい。さうして、このような戒を說くにつけても、それに禍福利害をからませてあり、さうして、その福利が富貴長壽とせられてゐるところに、通俗的な、シナ民族においてはそれに特有なところのある、宗敎—道德觀念があらわれてゐる。

さて上に考へたようにして道士や佛家の主張した八月三日の祭は、今では、實際にも、ところ〴〵で行はれてゐる。北平では、この日に竈君廟にまうでるならはしがあり、南のほうの蘇州にもそれがある。ほかのところにも同じことはあらうと思ふ

が、一々は知らぬ。また竈君經に說いてあるように、家々で祭をするところもあつて、福建廣東の地方にもそれは見られる。しかしおしなべていふと、十二月の祭ほどに廣くも盛にも行はれてゐないのではあるまいか。道士や佛家の主張にかゝはらず、十二月の祭が少しも衰へないところに、シナ民族の竈神に對する態度、從つてまたかれらの宗教—道德觀が見られるのである。たゞ十二月の祭においても、范成大の詩に見えるように酒肉を供することが行はれなくなつて、糖または果菜のたぐひのみを用ゐるようになつたことには、或は道士の何等かのはたらきがあつたのかもしれぬ。福壽經に「朔望不須腥肉供、吾神齋素喜清香、每天敬獻家常飯、勝似大祭猪合羊、」の句があることも、これについて思ひ出される。竈神を祭るには肉を用ゐるのが古くからのならはしであつて、それが（しかたもそれについての考へかたも違つて來ながら）南宋時代までもつゞいてゐたのに、それから後のいつからか、今のようになつたことには、何か特殊の運動がその間にあつたことを思はせる。安竈經には酒を用ゐることが記してあるが、これは道教の祭のしかたといふよりも、竈神を祭るばあひであるために、いくらかはもとからのならはしを保存させる意味で、いはれたことではなからうか。しかし今はそれも用ゐないことになつてゐる。たゞ今でも、江蘇の或る地方では魚酒を供へるものがあり、陝西でも酒や糟を用ゐるところがあるといふが（中華全國風俗志）、これはもとのならはしのかすかなごりであらう。また、家々で竈神を祭るほかに、竈君廟が設けられ、八月三日に人々がそれにまうでるならはしの生じたのも、道士によつて導かれたことなのであらう。竈神はもと〳〵家のうちの竈にゐるものであり、家族生活の神であるから家をはなれたところに特にその廟をたてるといふことは、竈神の本質にそむくものであるから、これは、竈神を一般的宗教としての道教の領分にとり入れようとした、道士の考から出たことに違ひないので、この廟が道觀に附屬してゐるばあひのあるのは、一層よくそのことを示すものであらう。

以上が、シナの民間信仰において道德的意義のあるはたらきをするものとせられてゐる竈神の性質と、それを祭るしかたと

その意味と、並にそれらにあらはれてゐるシナの民衆の宗教道德觀念との、おほよそである。シナ民族の思想としては、道德は人のことであつて神のあづかるところではなく、神はたゞ人の行ひを監視して、そのよしあしに應じた禍なり福なりを人に降すはたらきをするのみであるが、禍を受けず福、卽ち富貴長壽、を得ることが、人のすべての行ひの根本の動機でもあり、人の生活の究極の目的でもあるものにおいては、一方では、行ひのよしあしにはかゝはりがなく、いひかへると道德觀念から離れて、ただ神に祈り神を祭ることによつて、福を得ようとすると共に、他方では、禍と福とは行ひのよしあしの「むくひ」であるといふ考から、よいことをしないにかゝはらず、したように神に見せかけてそれに應ずる福を神から受けようとする。竈神を祭れば祭ることによつてその神から福が與へられるといふのは、前のほうのであつて、むかし行はれたこの神の祭、または道士の唱へた八月三日のが、それであり竈神を籠絡しまたは束縛することによつて天帝を欺き、欺くことによつて天帝から福をうけようとするのは、後のほうのであつて、近代のならはしとしての十二月の竈神の祭は、それであるが、この後のほうのは、宗教的には竈神をけがし天帝をけがすものであるといはねばならず、道德的にはわるい行ひに更にわるい行ひを重ねるものとしなければならぬ。現代の知識人がかういふ習俗を非難するのは、このためであらう。しかし、それをそのようにまじめに考へないところに、これまでのシナの民衆の宗教—道德觀念があつた。神から降る禍をさけようとするにしても、神に對しわが罪を懺悔してその赦を請ふ、といふ態度のあることは認めがたい。シナの佛教においては、懺悔は一つの儀禮となり、道教においてもそれがうけつがれてゐると共に、罪をなくするのは呪の力とせられてゐることが、思ひあはされよう。儒家の教においては、過があつても行を改めることによつて禍がさけられることになつてゐるが、これは道德觀念としてであつて、神にはかゝはりの無いことである。さうして福と禍とが神にかゝはりのあるものとして考へられるばあひには、要するに上に述べた二つの態度が、一般には、とられてゐる。だから神にかゝはりがあるものと考へるといつても、それはほんとうの

意義での宗教的な心情からではない。神の力とめぐみとに依賴するのではなくして、神を人の意のまゝにはたらかせ神を使はうとするのであり、そこに遠い上代の多くの民族のもつてゐた、いはゞ呪術的な考へかたがある。近代の竈神の祭の根柢となつてゐる思想が先秦のむかしにもあつたらうといふことは、このような思想そのものの性質からも、また考へ得られることである。いろ〳〵の方面におけるシナの民衆の文化が、その實質もしくは精神においては、近代のそれとても、遠い上代のとさしたるかはりが無く、ただくみたてが複雜になつてゐるに過ぎない、といつてもひどいまちがひではないほどであるが、その一つの例がこゝにもあるといふべきであらう。佛教が民衆化すると共に、呪術化し、または實際的方面において民間信仰的要素を多くもつてゐる道教といろ〳〵の點で結びつき、或はもと〳〵性質が全くちがつてゐて根本の精神が反對である佛教と道教とが、民間信仰においては、ほとんど同じもののようにとりあつかはれることになつて來たのも、シナの民衆の宗教思想が、その實質においては、遠い上代の民間信仰のひきつゞきであつて、それからさして進んではゐず、さうしてそのような民間信仰のうちに、佛教も道教も沒入したことを示すものであり、さうしてそれが、民俗としての竈神の信仰においてよくあらはれてゐるのである。これが、この小稿において考へたところによつて、おのづから知られて來たことなのである。

ただ一般に遠い上代の呪術宗教的なしわざは、部族もしくは部落の共同の生活のために行はれたものが多いようであり、シナにおいてもまたそれがあつたらうと思はれるが、われ〳〵が知り得る時代になつては、竈神は家族生活の神として考へられてゐたのであり、さうしてそれから後には、近代に至るまでも、竈神のはたらきには社會的意義は少しも無く、部落的共同生活のおもかげも全く見えず、どこまでも家族生活においてのことに限られてゐる。これは、家族生活が人の生活の基礎となつてゐる時代の、竈神の本質から來たことではあるが、しかしまた、さういふ家族生活が人の生活のすべてであるといつてもよいほどの、シナの民族生活の特殊のすがたにもよることであらう。のみならず、竈神が人の行ひを見てゐるといふのは、全體と

しての家族の生活のありさまについてよりも、家族のうちのそれ〳〵の個人のしわざについてのことであるように見えるが、これもまた、人の行ひの主體がもと〳〵個人であるからであると共に、シナ民族の生活のすべてをつらぬいてゐる個人本位の生活のあらわれでもあらう。人の行ひの「むくい」としての富貴貧賤は家族の全體にかゝはることであるとするにしても、それすらも、事實においては、家長の地位にあるものの富貴貧賤であり、從つて家長の個人としての行ひの「むくい」であるし、壽夭に至つては全く個人のことであるのを、考へるがよい。シナ民族においては、家族生活が生活の基礎とはなつてゐるが、その家族生活は家族を一つの共同體とするものではないのである。竈神のはたらきはこのようなものであるから、八月三日に多くの人々が竈君廟にまうでて香火を供へることがあつても、それは個人がそのめい〳〵のために福を祈る意味であるので、社會的共同生活のきぶんがそれにあらはれてはゐない。このようなばあひに、群集の動きはあるが、組織せられた集團のはたらきはない。かういふ點においては、部族的生活部落的生活のために多くのことが行はれたらしい遠いむかしのありさまとは違ふが、呪術宗教的な態度においては、そのころからのひきつゞきであると考へられる。

なほいひそへておく。竈神の道德的のはたらきを考へた上は、この神が何ごとをよい行ひとし何ごとをわるい行ひとすると思はれてゐるかといふこと、卽ちシナの民衆の道德的觀念としてのよいとせられわるいとせられる行ひの何であるかを、具體的にしらべてみなければならず、すべての生活が個人本位でありもしくは群集的であるといふことも、それによつて明かになるのであるが、それはまた別のをりのしごととしようと思ふ。

そへごと。この小稿を草するに當り、友人ハラダマサミ君がその蒐集せられた資料を提供せられたこと、フクヰコウジユン君クリタナホミ君がかの地の習俗について種々の知識を與へられたことについて、こゝにおれいを申しのべる。